

七飯町

7342 山本さちえ

1. 概要と歴史

1.1 地名の由来

町名の由来は、1980年に七重村と飯田村が合併したときに七飯村と称したことに由来する。また、アイヌ語の「ナムナイ」(冷たい川の意)である。

1.2 歴史

図1 八王子千人同心の遺品の鞍



出典：七飯町歴史館 HP

1575年大中山に三嶋神社が勧請され、和人が定住したと考えられる。1615年からはすでに松前藩領として名主がいた。1751年七重に鍛冶が居住する。1804年朝鮮人参畑を開く。1858,1859年甲斐武田家臣の子孫である八王子千人同心が移住する。七重菜園や養蚕など北海道のはじめての農作物を作った。1869年蝦夷を北海道と改めて11国86郡に分け、七重は渡島国亀田郡七重村となる。ガルトネル開墾条約事件が起こり、耕地の租借についての交渉が始まる。1875年七重農業試験場で水田試作する。1877年七重、飯田、

藤山、城山、峠下、軍川の各村を管轄する七重外五ヶ村戸長役場が設置される。1879年七重町と飯田町が合併し七飯村に、藤山村と城山村が合併して藤城村となる。1885年大中山村と鶴野村が戸長役場に編入、現在の行政区域になる。1902年亀田郡七飯村、大中山村、藤城村、軍川村、峠下村、鶴野村が合併する。1907年一級町村制 1957年町制が施行され、七飯町が誕生した。

七飯町誕生後からの歴史は、1913年道立大沼公園が新日本三景に当選する。1934年七飯町の人口が1万人を越す。1964年大沼公園で「雪と氷の祭典」が実施される。1973年アカマツが町木に指定される。1977年七飯町開基100周年を記念して、記念宣伝塔が設置されたり、記念八ガキが作成されたり、記念映画「豊郷ななえ」が上映されたりした。11月には100年記念式典が挙行され、記念碑の除幕や町民憲章の制定、町歌発表された。1987年「国際観光モデル地区」に函館・大沼地区が指定される。1995年赤松街道が「新・日本の街路樹百景」に選ばれる。

1.3 地図

図 2 七飯町の位置



出典：七飯町役場 HP

七飯町は北海道渡島半島の南部にある亀田郡に位置し、面積は 216,61 km²である。

図 3 町の木アカマツ



出典：七飯町役場 HP

図 4 町の花リンゴの花



出典：七飯町役場 HP

1.4 地理・気候

七飯町は北海道の南西部に位置し、東経 140 度 41 分 39 秒、北緯 41 度 53 分 43 秒の役場を中心にする町である。同緯度の世界の都市は、シカゴ（アメリカ）、バルセロナ（スペイン）、ローマ（イタリア）などがある。また函館市、北斗市、森町、鹿部町に隣接し、七飯町東部には横津岳、北部には駒ヶ岳、大沼、小沼がある。町は大沼トンネルによって南北に別れている。北部は活火山である駒ヶ岳を擁する大沼地区で、平地は水田、山麓地帯は酪農や畑作が行われている。南部は国道 5 号によって東西に分けられ、西部は水田、東部は畑作・果樹地帯で国道沿線は市街地として開発が進んでいる。

姉妹都市は、日本では香川県木田郡三木町で、海外ではアメリカ合衆国マサチューセッツ州コンコードである。マサチューセッツ州コンコードからの留学生も受け入れている。



出典：七飯町役場 HP

七飯町の気候は爽やかである。夏の平均気温は 25 に達しなく、冬の平均気温は - 5 に達しない。北海道内で最も温暖な気候である。また、6 月は梅雨がなく晴天が続き、7・8 月になったら気温は高くなるが湿度は低く過ごしやすい。大沼の南端部はこの過ごしやすい気候によってスポーツが盛んである。特にサッカーはトルシエ監督の日本代表や Jリーグのチーム、海外の代表チームが合宿の地として利用したりするほどである。冬でもあまり寒くならず、雪も少ない。北海道に位置しているが、本州のような気候である。四季の移り変わりがはっきりと感じられる良好な自然環境である。

七飯町はこのような温暖な気候や肥沃な土壤に恵まれているため、農業に適した地である。そのため北海道開拓の基礎となる西洋農業発祥の地となる。東部および北部の山岳地帯は豊かな森林資源に恵まれているうえに、秀峰駒ヶ岳や大沼、小沼、じゅん菜沼からなる大沼国定公園では四季折々の美しさを堪能できる。

図 6 夏の大沼地区



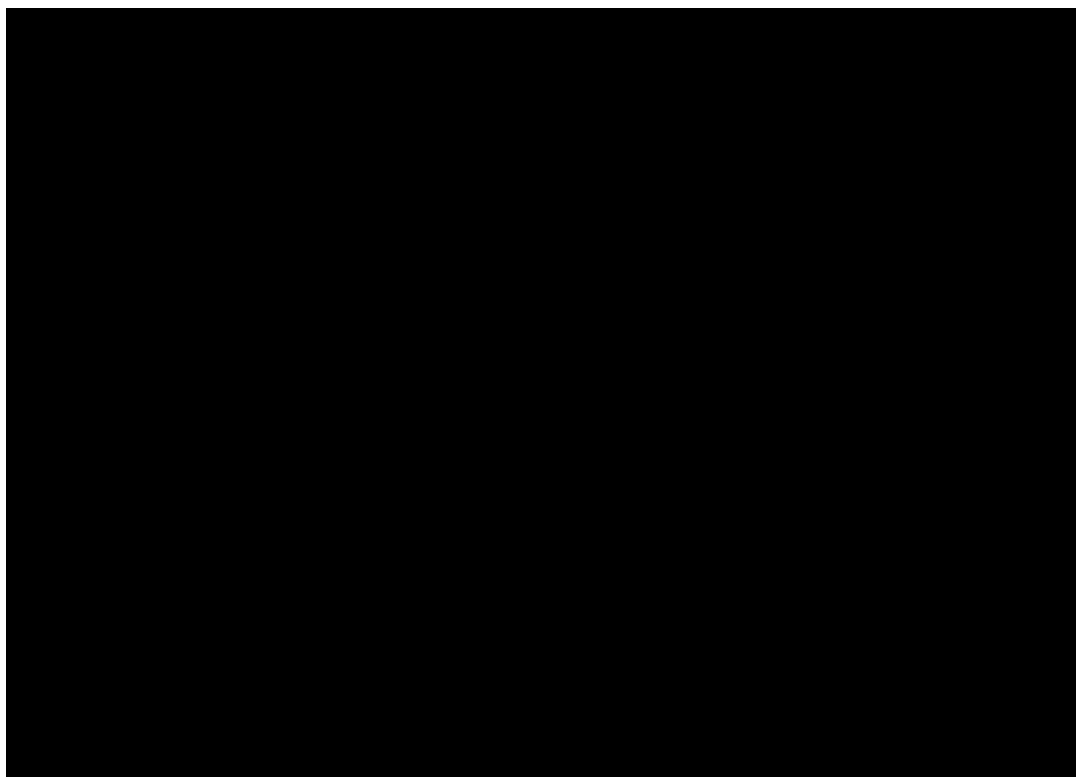
出典：七飯町役場 HP

図 7 秋の大沼湖畔の景色



出典；七飯町役場 HP

1.5 人口・世帯数推移



出典：北海道庁 HP

七飯町の人口は全体的に増加している。1970年に都市計画法が制定されたことによって宅地開発が活発になり、1975年以降は函館市のベッドタウンとして急増した。1980年の国勢調査では初めて2万人に達した。1995年の国勢調査では、全道町村で5番目の人口を有し、人口の増加率について言えば、渡島管内で1番の伸びである。また札幌圏の石狩町（現石狩市）、広島町（現北広島市）に次いで全道で3番目である。

現在も人口・世帯数ともに増加を続けている。北海道が2002年に公表した市町村合併シミュレーションでは、各市町村の2020年までの将来人口推計を行った。それによると、七飯町は2000年の人口と比べて11.4%増えて3万1,575になると予測されている。高齢化率を見ると、年少人口が減少して老年人口が増加していく。だが、生産年齢人口は3年後の2010年までは増加傾向だが、そこをピークに減少していく。2020年には高齢化率が32%になると予測されている。

2. 産業と観光

2.1 産業

表1 平成18年の森林面積(ha)

	天然林	人工林	無立木地	その他	合計
森林官局所管国有林	1,087	1,711		666	3,464
その他の国有林			1		1
道有林	2,190	263	453	116	3,022
市町村有林	458	626	7		1,091
その他の民有林	3,269	2,505	94		5,868
合計	7,004	5,105	555	782	13,446

出典：北海道庁 HP

表2 工業の推移(社・人・万円)

	事業所数	従業者数	出荷額
1997年	39	1,293	5,275,848
1998年	44	1,332	4,419,040
1999年	39	1,472	3,983,183
2000年	38	1,572	5,281,388
2001年	39	1,387	4,138,415
2002年	41	1,563	3,233,550
2003年	38	1,264	6,005,536
2004年	34	1,228	3,756,759
2005年	33	1,163	

出典：七飯町役場・北海道庁 HP

七飯町の工業はここ10年ずっと事業所数や従業者数に大きな変化はないが、出荷額には波があることがわかる。

平均では事業所数が約38社で、従業者数が約1364人、出荷額は451億1715万円である。

1973年道内初のIC工業が七飯町で操業したことから先端技術産業が発達している。1984年「テクノポリス函館」の地域指定をきっかけに本州からの先端技術産業を中心とした企業誘致を積極的に行っている。

表3 平成17年の商業(社・人・万円)

	卸売業	小売業	総数
事業所数	36	167	203
従業者数	232	1,389	1,621
年間販売額	759,021	1,560,071	2,319,092

出典：北海道庁 HP

商業は経営規模の小さい個人商店が多い。近年大型店が進出したが、購買力が流出しているため商業振興が課題である。

表4 内水面漁業：湖沼漁業（kg・千円）

	ふな		こい		わかさぎ		えび		じゅん菜		合計	
	漁獲量	生産額	漁獲量	生産額	漁獲量	生産額	漁獲量	生産額	漁獲量	生産額	漁獲量	生産額
1996年	730	292	1,647	659	26,038	13,019	534	534	3,642	4,196	32,591	18,700
1997年	586	318	3,099	1,085	26,692	13,346	320	320	2,217	3,990	32,914	19,059
1998年	360	144	1,637	701	26,208	13,104	752	752	3,324	3,889	32,281	18,590
1999年	210	84	1,931	700	31,708	15,854	906	906	3,032	3,547	37,787	21,091
2000年	835	334	1,503	526	23,696	11,848	1,331	1,331	2,753	3,221	30,118	17,260

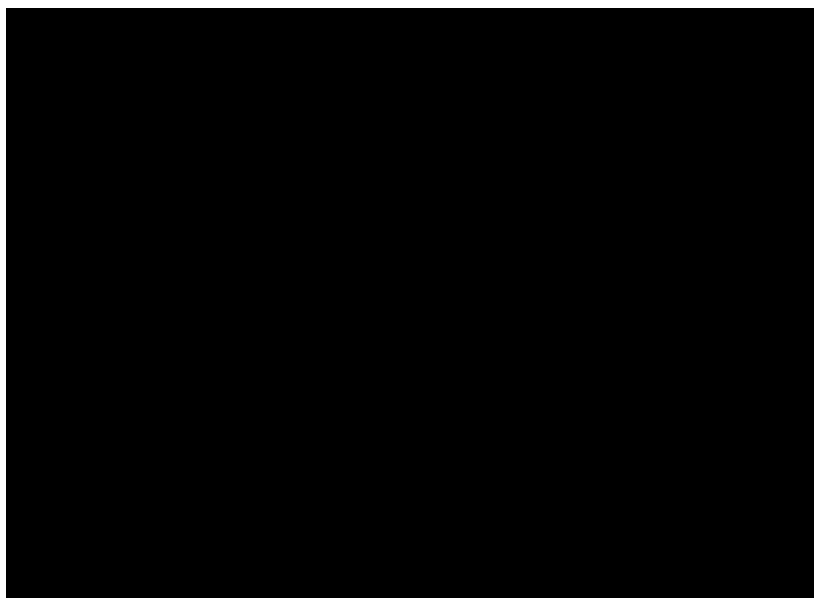
出典：七飯町役場 HP

水産業は明治時代から移植・ふ化養殖事業が積極的に行われ、じゅん菜沼で採集されるジュンサイは高級品で全国に知られている。

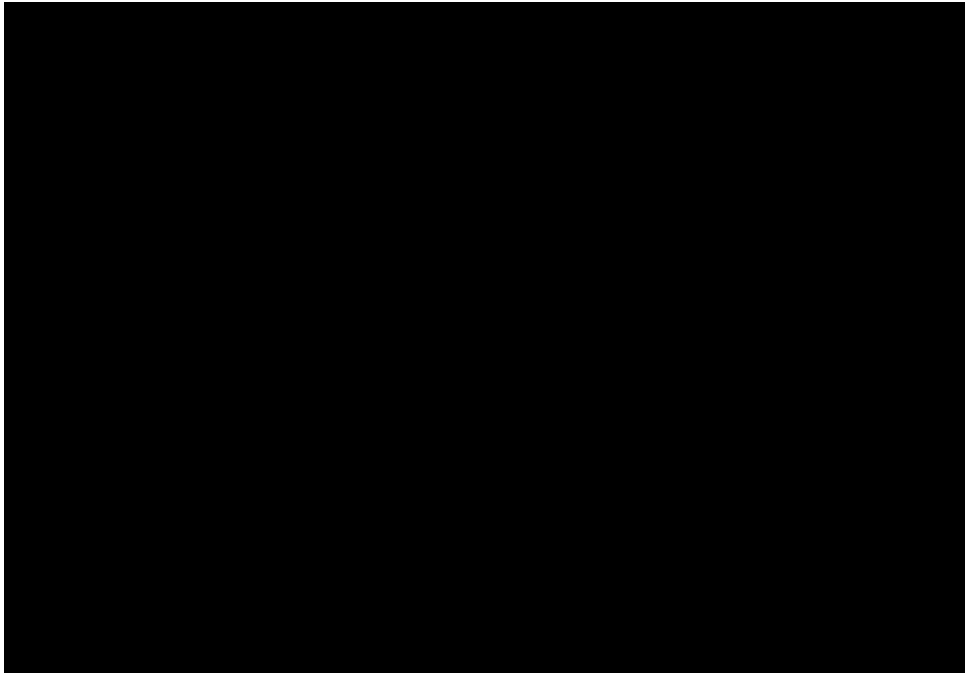
ふなの漁獲量、生産額ともに1999年に減少するが2000年に1996年の数字を超える回復を見せている。こいにおいては2000年の漁獲量、生産額は1997年の約半分になっている。ワカサギは前年に比べて2000年の漁獲量、生産額ともに減少している。えびは漁獲量と生産額が等しくなっていることがわかる。

1996年から2000年までの平均漁獲量は3t3138kgで、平均生産額は1894万円である。

2.2 産業別人口



七飯町は第1次産業に就業している人の割合が大きい。農業が盛んであり、とくにリンゴの栽培が有名である。近年はカーネーションの栽培も盛んで、さらに農業に力が入っている。また大沼地区に代表される観光地として多くのホテルや民宿があるため、第3次産業が発達していることがわかる。



七飯町は主に農業、商業、工業が中心の町である。特に商業は個人経営が多いため発達している。

2.3 農業

表5 野菜の作付面積と収穫量 (ha・t)

	作付面積	収穫量
だいこん	190	8,800
かぶ	25	970
にんじん	285	8,500
ながいも	1	16
はくさい	3	134
キャベツ	15	577
ほうれん草	61	697
アスパラガス	7	66
ブロッコリー	2	16
レタス	1	16
ねぎ	66	2,160
きゅうり	10	579
かぼちゃ	14	190
なす	1	12
トマト	5	257
スイートコーン	41	280
えだまめ	38	276

七飯町の農業の中心は水稻、馬鈴薯、だいこん、にんじんなどの畑作、リンゴ、ブドウなどの果樹、酪農、畜産と全般にわたる。中でもリンゴは七飯町が日本で初めて栽培した洋種農作物で、七飯町の特産物である。また七飯町は現在の北海道農業の基盤で、西洋農業発祥の地と言われている。

1869年蝦夷地を占領していた榎本武揚は西洋農法による七飯開墾のため、プロシア人のガルトネルに300万坪の土地を貸し付ける契約をした。ガルトネルはリンゴやブドウなど多くの農作物を日本に紹介した。現在もこれを受け継いでいる。

七飯町は男爵イモ発祥の地である。1908 年川田男爵が外国の苗種商からじゃがいも 11 種を購入して栽培したのが「男爵イモ」のはじまりである。

川田男爵は機械工学を学ぶためにイギリスで留学経験があり、その思い出のイギリスを原産とする品種を購入して試作を重ねた。やがて男爵イモは病気に強く早く実ることがわかり、品質・収量が優れていることが栽培の輪を広めた。

1947 年に男爵イモに関する二つの記念碑が設立された。「男爵イモ発祥の地」の記念碑と「男爵薯を讃ふ」の記念碑である。凶作や不況、戦争などの生活苦から人々を救ってきた男爵イモ、また男爵イモを導入して栽培し、普及のきっかけを作った川田男爵への敬意の念が記念碑に込められている。

2.4 観光

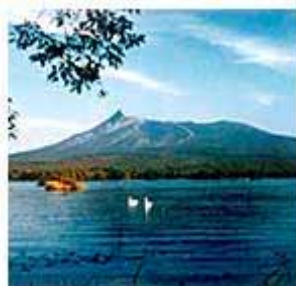
図 11 七飯町観光マップ



出典：七飯町役場 HP

大沼国定公園

図 12 大沼国定公園



出典：七飯町役場 HP

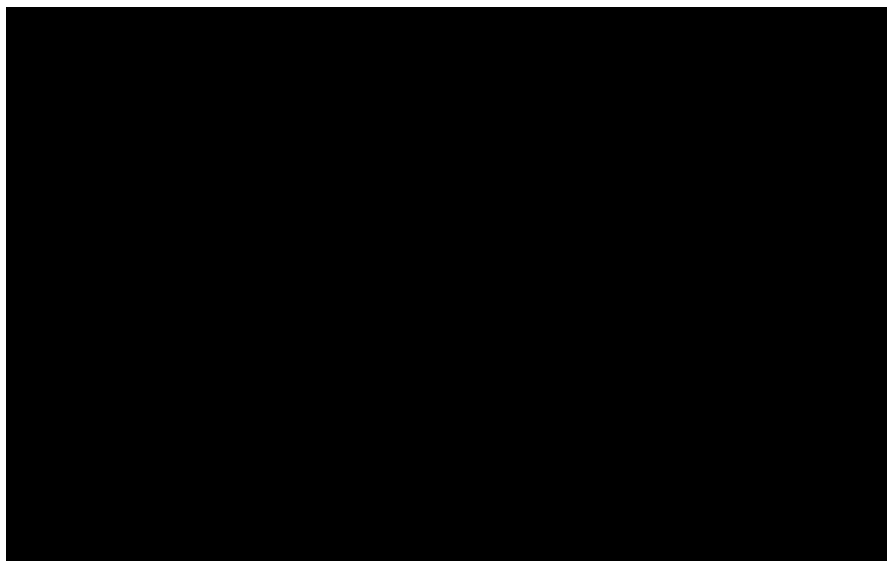
大沼という言葉の由来は、アイヌ語の「ポロ・ト」からきている。「ポロ」は「大いなる」という意味で、「ト」は「湖沼」や「水溜まり」という意味である。そこから「大沼」ととられました。

大沼周辺は 1903 年から道立公園として自然が保護され、公園施設が整備され、全国で最も古い自然公園の一つである。1915 年には新日本三景の一つに選ばれ、1957 年に大沼を国

定公園にしようとする昇格運動に背中を押されて要望書を道に提出した。翌 1958 年道立大沼公園は 13 番目の国定公園の指定を受け、大沼は国の特別保護区域となった。

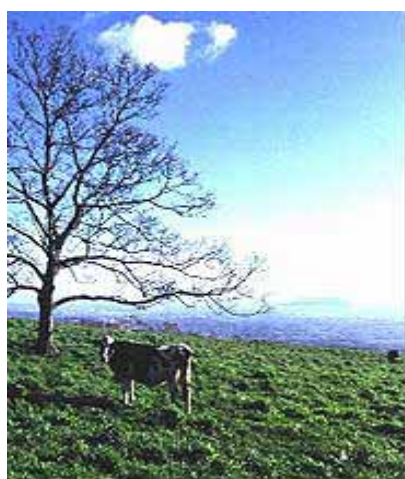
大沼国定公園は秀峰駒ヶ岳と大沼湖、小沼湖、蓴菜沼を有している。またリゾート地としてホテル・ペンション・民宿などの宿泊施設、ゴルフ場、スキー場、テニスコート、サイクリングロードなどの野外運動施設が民間業者によって整備されている。

春は駒ヶ岳開山祭、大沼湖畔駅伝競走大会、夏は大沼湖水まつり、秋は北海道大沼グレートラン・ウォーク、冬は大沼函館雪と氷の祭典などイベントが開催されている。



城岱牧場

図 14 城岱牧場



出典：七飯町村役場HP

たとえば牛を例にとると、ここでは運動不足による体格の崩れ、繁殖障害などの問題を解消してきた。のびのびとした環境で足腰や心臓の強い、健康な牛を育成することで経営の安定化を図っている。

1920年に村有牧野・野草牧草地として始まり、現在は町営牧場として利用されている。

北に駒ヶ岳、南に函館山、南西眼下には大野平野を一望できる牧場で、道路沿いの展望台からは函館の夜景を見ることができ、「裏夜景」と呼ばれている。

牧場の中を通る「城岱スカイライン」は七飯町中心部と観光地である大沼地区を結ぶアスファルト舗装されているワインディングロードである。道路は峠道特有の急勾配な上り、下り坂が連続している。スカイライン頂上付近の無料駐車場からは大野平野をはじめとする駒ヶ岳が一望できる。

白鳥台セバット

図 15 白鳥台セバット



出典：七飯町役場HP

大沼湖と小沼湖の接点で、地元ではセバットという狭まった場所を意味する言葉で呼ばれている。

冬になっても湖水が凍らないため、冬の渡り鳥の休息所となっている。12月下旬から3月の下旬ころはオオハクチョウ約150羽が飛来する。またコブハクチョウは通年見ることができる。

日暮山展望台

昭和の初めまでは小沼山と呼ばれていたが、山に登った人々が眺望のあまりの美しさに我を忘れ、日暮れまでその眺望に見とれていたことから日暮山と呼ばれるようになった。

図 16 日暮山からの景色



出典：七飯町役場HP

参照HP

七飯町役場：<http://www.town.nanae.hokkaido.jp/>

北海道庁：<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/>

七飯町歴史館：<http://www.town.nanae.hokkaido.jp/info/culture/rekisikan.htm>

Wikipedia：<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%83%E9%A3%AF%E7%94%BA>

カムイミンタラ：<http://kam-r.sub.jp/ainu/index.html>

函館開発建設部：<http://www.hk.hkd.mlit.go.jp/index.html>

生き生き情報交流サービス；<http://www.post.japanpost.jp/ikiiki/hokkaido/nanae.htm>

渡島地域活性化戦略会議：

<http://www.town.nanae.hokkaido.jp/gappei/kentoukekka/patern-a/002.htm>

城岱牧場：<http://nanae.dyndns.org/i-shirotae.htm>

観光のくにつくり推進局：<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/kz/kkd/230-tsuru/tsuru>